

で人間側のモラルの問題である。電算機の中で同じ処理手続を通して出て来る結果でも、情報として入れるデータの量と質により、又逆に、同じ量と質の情報を入れた場合でも、処理手続の精度により、大いに異なる結果を生ずる。時には正反対の結果さえ生むのである。覚えておいて欲しい。電算機は意志も、モラルも持たないことを。人間が指示した通りに働くだけである。国民総背番号制に成ろうとも、国民凡てが電算機を知る必要はない。ただ、どういう情報を入力し、出力された結果をどう使っているのかと言う点だけは、目を光らせて見て行くべきである。集められた情報と言うのは、電算機に係わり無く、それだけで充分意味があるのだから。(16回生)

屋根裏部屋の人生

寺沢 綺佐子

フランス映画でパリの街並が登場すると、そこにはいつも7～8階建のアパルトマンがずらりと立ち並んでいる窓にはそれぞれにバルコンがついていて、白い紗のようなカーテンが掛かっている。その7～8階のずっとずっと上の方、てっぺんには、小さな90×50cmくらいの窓が斜めに、つまり太陽の方向に向けて斜めにとりつけられている。この窓は屋根裏部屋の窓である。昔は、これは女中さんの部屋として使われていたもので、大抵は2×3mくらいのものであるからベッドと小さい机と椅子を置けば満員になる。しかし、時代がかわって、現在は、これらの屋根裏部屋は外国留学生の下宿に活用されている。つまりお金のない外国人学生が、わずか200F(1万2,000円前後)くらいの部屋代を払ってここを借りて住むのである。水道は廊下のはじ、洗面所は共通。

私も最初の頃、ソルボンヌの学生だった頃には、こうした屋根裏を借りていた。運良く隣の2部屋続きの屋根裏部屋にフランス人の若夫婦が住んでいて、シャワーをいつでも貸してくれた。

私の小さい部屋からは、夕陽の沈むのが毎日、それはそれは美しく眺められた。オレンジ色、バラ色、うすい桃色へと変化する有様を、飽きずに、窓枠により掛かって眺めた。時折、私は外から自分の部屋の窓を見上げた。しかし、それは8階の小さい小さい窓。誰も気付かないてっぺんの小さい窓。でも、夕方、陽を受けてキラキラと輝やっていた。

部屋の壁に私はイブモンタンの大きな写真を貼った。その部屋を去る時、私はこの写真を残した。その屋根裏部屋を私に貸してくれたマダムのところへはその後もしばしば訪れた。そのたびに、こ

の年取ったマダムは、「キサコはイブモンタンを捨てたの？ 彼は、いつまでもあそこに居るのに。」と言った。今思うと、淡い、ほんやりした甘さに包まれたような感じのパリの一人暮らしである。

(17回生)

職 場 よ り

川 島 美 保

卒業してからもう1年8ヶ月たちました。こんなに長く勤めるつもりはなかったのに、月日のたつのは本当に早いものです。

私が入社したのは銀行、それも調査部というところですよ。銀行というと一般に預金の出入を行なっている窓口を思い浮かべますが、私も最初そうでした。銀行の中の仕事はどのようなことをしているのか全然知らず、まして調査部というものが存在することさえも知らずに入社したのですから、今考えるとずい分無責任な話です。

さて私の入った調査部というところですが、これは大別して2つの部門に分かれます。1つは経済全体の動向を調べる経済調査課、もう1つは産業界個々の動向についての企業調査課です(他の銀行によっては部の組織になっています)。私は前者の経済調査課に配属となりましたが、地理とは全然関係のない経済で、しかも担当が金融と決まり初めはどうなることかと心配ものでした。しかし、門前の小僧習わぬ経を読むのとえにもあるように月日がたつに従って見よう見まねがだんだん本物らしくなっていくものです。今では新聞を見ても一番最初に経済関係の記事が気になりだすくらいになり、経済が嫌いであった学生時代とは大分違うものだと自分自身感じています。まあ女性の仕事といっても半分位は清書とか計算とかいう雑用が占めているのが現状ですが。

私達女性でやった大きな仕事としては調査月報を2回出したということがあります。調査月報というのは銀行の調査部で毎月発行しているもので、経済界では高い評価のものとなっています。毎月交替で経済動向などをテーマとして発表しており、調査部の主な仕事の1つです。また経済見通しの作業をすることも大切な仕事です。このように調査部にいる人達はふつう銀行員といわれるイメージより、まさにエコノミストという感じです。そんな中で女性の戦力化という部長の考えから私と一緒に入行した5人と古くからいる人の計6人が分担して月報にとり組んだわけで、昨年の第1回目は